



水難事故の際、自分の命を守るための行動を理解することを目指しました。第6時では、自分の泳力で身を守ることができる行動・着衣の検証をしました。「身に着ける服や物を選び、自分の設定した課題に取り組む」（選択）「友達とかかわり、考えを更新する」（協働）場面を仕組みました。



それぞれが考えた衣服で浮いている生徒



学習計画へ

【救助を要する状況】

キャンプに来た。池の近くの公園で遊んでいたところ、ふいに足から池に落ちた。池の底に足はつかず、落ちた側のへりには捕まるところがなく上がることができない。上ることのできるようなヘリは反対側であり、泳ぐとしたら1分間は泳ぎ続ける必要がある。池には木やこみなど様々なものが浮いている状況である。当然着衣である。

自分の水泳の力量

クロール 平泳ぎ ⇔ 泳力がもたない

【結果】
・泳ぐのは無理。
・服を着ている時点で泳ぐのは難しい
・体力がもたない

浮いて待つのが自分には体力面でも最適

【現実的な浮くのいい服装】
・帽子、ダウン、ジーンズ（水通しにくい）、靴
（山にキャンプしに行くときは、寒いと考えたため、ダウンを着ている進率も高いから、現実的）

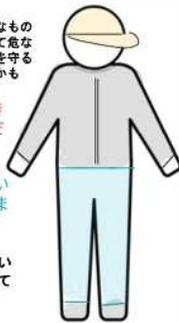
自分の身を守ることができるキャンプでの現実的な服装はこれだ！

帽子 池には色んなものが浮いているから、頭を守るために必要かも

ダウン まじで浮きやすそうだった

水を通しづらいジーンズ 通しやすいものよりまし

靴（サンダル含む） 浮きやすいし、履いていて安全



検証後のまとめ

【身に着ける服や物を選び、自分の設定した課題に取り組む】

水難事故の際、自分の泳力や着衣を考慮したうえで、命を守るための行動をとる必要があります。そのため、着衣泳では生徒が自分の課題を設定し、検証する着衣を準備しました。

生徒Aは泳ぎがあまり得意ではないため、「浮いて待つ」ことができる着衣を探すことを課題とし、上着には軽くて空気を含むダウンジャケットを、ズボンには浮きやすいと考えた綿素材のものを用意し、検証授業に臨みました。

【友達とかかわり、考えを更新する】

検証の授業では、それぞれが準備した服装で着衣泳を行い、泳ぐ・浮く活動をグループ内で見合いながら検証しました。

生徒Aはダウンジャケットがよく浮くことを確認し、満足していましたが、綿のズボンは水を吸って動きにくいことに気付きました。さらに、1人1台端末を用いた班でのかわりの中で、班員がはいたジーンズが水を通さず、下半身もよく浮いていることに驚き、次時の検証では自身もジーンズを着用しました。

教師の働きかけ

水難事故に遭った場合、「泳いで岸までいく」「助けが来るまで浮いて待つ」といった視点をもたせたうえで、課題を設定させました。

着衣泳で用いる服装は自由度を広げました。体験してほしい厚手の冬服については、教師も準備しておきました。

バディ等安全面を保障したうえで、検証する時間を十分に確保しました。泳いだり、浮いたりした感想を友達と自由に意見交換できるようにしました。

友達との意見交換の他に、生徒間で互いの検証の成果を1人1台端末で共有できる環境を整え、考えをまとめる際の参考にさせました。

自分の命を守る行動を理解するため、体操服などの一律な衣服で着衣泳を行うのではなく、より浮きやすい服装を考えて準備しました。その結果、自分の生活を想定して衣服を選択することができました。

着衣泳の時間には、自分が準備した衣服で泳ぎ方や浮き方を自由に検証できる時間を設け、意見交換の場を設けました。これにより、様々な衣服の特徴を知ることができ、自分の考えを振り返り、新たな視点を得ることができました。

